**菊池 仁康（きくち・にこう）**

**1、プロフィール**

ドフトエフスキー、プーシュキンら露西亜文学の研究、翻訳に携わる。終生、詩人・評論家福士幸次郎との親交を深めた。銀行業を営み、地元実業界発展に寄与した。

＜生没＞

1895（明治28）年５月29日～1967（昭和42）年９月14日

＜代表作＞

『露西亜二十一人集』（大正11年）。『プーシュキン全集 第一巻』（昭和11年）、『プーシュキン全集 第二巻』（同12年）。

＜青森県との関わり＞

板柳町出身。プーシュキンなど露西亜文学の研究・翻訳者。（株）板柳銀行取締役頭取として実業界に手腕を発揮。

**２、作家解説**

明治28年、北津軽郡板柳村（現 板柳町）に父菊池仁了の長男として出生した。仁了の兄仁候は、同33年（株）板柳銀行を創立する。県立青森中学校卒業後上京。明治大学政治経済科、露西亜神学校、日露協会学校で露西亜文学を学び、露西亜新聞社政治部に在職中、『ドフトエフスキイ全集』をロシアから取り寄せ、小説『白痴』の翻訳に没頭した。大正５年から著述業に従事し、日本評論社の『ゴオルキイ全集 第五巻』では５編の翻訳を担当。同11年には『露西亜二十一人集』を善文社から刊行した。同８年から税務署に勤務したが、同11年母の死去により帰郷。（株）板柳銀行々員となり、同15年には同行常務取締役に就任した。

同12年暮れ関東大震災の難を逃れ、菊池を頼って詩人・評論家の福士幸次郎が帰郷した。菊池は福士の提唱した地方主義運動に賛同し、経済的援助を惜しまなかった。自身も、同13年文学講習会では、「露西亜国民文学の起源から発達まで」と題した講師を務めた。その後、東京へ戻った福士は度々板柳に菊池を尋ね、旧交を深めた。

戦前、（株）板柳銀行取締役頭取、（株）菊屋商事部取締役社長、（株）菊屋百貨店取締役社長、（株）青森貯蓄銀行取締役頭取として、大いに地元経済界に手腕を振った。特に、昭和18年の一県一行合併による（株）青森銀行創立に尽力した。

一方、同11年には、「ロシア近代文学の父」と称えられたプーシュキン没後百年を記念した『プーシュキン全集』（全10巻予定）の刊行に取り組んだ。『全集』の内、第一巻、第ニ巻（小説篇上・中）を、詩人佐藤一英の紹介で、ボン書店（戦後、稀覯本詩集で名高い伝説の出版社）から刊行し、高い評価を得た。

同17年、福士や彫刻家渡辺義知らの応援を得て、第21回衆議院議員総選挙（翼賛選挙）に立候補したが、国政への道は叶わなかった。さらに、戦後初の第22回同選挙にも立候補した。その後も実業界で活躍し、同42年、板柳町で腸閉塞により逝去した。

**３、資料紹介**

〇『プーシュキン全集 第一巻』

図書

1936（昭和11）年９月１日

195mm×135mm

昭和11年頃から、菊池はロシア近代文学の父プーシュキン没後百年を記念して、『全集』（全10巻予定）の刊行に取り組んだ。小説部門第三巻迄の原稿を、東京市豊島区のボン書店（鳥羽茂 経営）に届けたが、同店の事情により第二巻迄の刊行となった。

**「昭和十年二月、津軽弁の詩の同人誌「芝生」は、青々とみずみずしく萌（も）え出たのである。この「芝生」の編集兼発行人に私がなったのは、植木曜介の意見であった。それは、植木か弘前新聞の方が多忙であったことと、当時私が詩の同人誌｢蒼きゅう（穹）｣と「北標」の発行を手がけていたこと、また幹事的役目をしていたことにもあるようだ。「芝生」第一集は、活版の小冊子。十六ページ。限定百部。定価十銭。」**

**小枝九郎「今昔「津軽方言詩」③」、平成10年7月4日、東奥日報。**